ＩＣＴで広がれ、障害者スポーツ

伊藤数子

株式会社パステルラボ　代表取締役

特定非営利活動法人 STAND　代表理事

昨年の夏はロンドンオリンピック・パラリンピックが開催されました。テレビなどのメディアで見聞きした方も多いのではないでしょうか？どんな場面を覚えていらっしゃいますか？思い浮かんだたくさんの素敵なシーンの中に、パラリンピックの選手は出てきましたでしょうか？

そうなんです。パラリンピックや障害者のスポーツは、その情報がまだまだ多くの人に届く機会が少ないのです。

障害者スポーツ大会のインターネット生中継

2003 年から、私たちＮＰＯ法人ＳＴＡＮＤでは、障害が原因で長距離移動や外泊ができない選手に、自分のチームが出場する大会を生で見てもらおうと、インターネット生中継を始めました。これまで、電動車椅子サッカー、アイススレッジホッケー、車いすテニス、車椅子バスケ、といろんな競技の生中継を行ってきました。実にたくさんのスポーツがあり、それらは本当に知られていないことを実感しました。なかなかマスメディアには出てきませんし、学校や地域でのスポーツのシーンにも、障害のある人が参加する機会も少ないのが現状です。スポーツを知ってもらうには、わかりやすく、伝わりやすいことが大変重要です。

そこで、私たちは、ウェブサイトを使って、映像や写真を多く載せて紹介を始めました。競技性の高いアスリートの活躍するトップスポーツのシーンからは、迫力やスポーツとしての魅力が伝わります。また、これから始めてみたい人には、わかりやすい導入の動画テキストとしての役目も果たせます。さらには、同じ障害の人が世界で活躍するシーンは、引きこもりがちだった障害者が、自らの殻を破る後押しにもなるのです。

インターネットは、障害者スポーツを普及するとともに、障害のある人の生活の質の向上にも有効なのです。

「大きくなったら何になる？」

毎年「大きくなったら何になる？」と題した小学校 1 年生へのアンケートを目にします。小学生になりたて、夢いっぱいの子どもたちは将来なりたいものを答えます。男の子の 1 位はスポーツ選手、女の子では 7 位にスポーツ選手が挙げられています（2011

年)。本当に多くの子どもたちが、かっこいいスポーツ選手に憧れます。

では、障害のある子どもたちに同じように将来の夢を質問したら、どのくらいの子どもがスポーツ選手を挙げるでしょう。男女ともベスト 10 に入ることは決してないでしょう。なぜなら、自分ができるスポーツがあること、その世界一を競う大会があること、そこにはそのスポーツを極めたトップアスリートがいることを知らないのです。

私は、全員の子どもにスポーツ選手に憧れてほしいと言っているのではありません。目が見えなくても、歩けなくてもできるスポーツがたくさんあって、それを極めるかっこいい障害者アスリートがいて大活躍していること、そしてそのスポーツをいつでも始められることを、多くの子どもに知ってほしいのです。そういう情報が十分にある環境にいてほしいのです。

それぞれの子どもがその中で何に興味を持って何にチャレンジをしたくなるのか、考えただけでもわくわくします。

スポーツは「見るだけもの」ではなく、「するもの」

私には奈良淳平という友人がいます。彼は脳性まひという障害があり、障害者スポーツ競技のひとつである「ボッチャ (※)」で次のリオパラリンピックを目指しています。2011 年には最も重い障害のクラスで日本チャンピオンに輝いた実績もあります。

※「ボッチャ」は、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目です。

奈良選手はこういいます。「ボッチャに出会うまでは自分はスポーツはただ見るだけのもの、と思っていました。でも今は違います。僕はスポーツをやっているんです。そしてその楽しさがわかりました。喜びを感じています」。

ボッチャというスポーツを知ったことが、奈良少年にとってのスポーツを、見るだけのカテゴリーから、するカテゴリーに変えてくれたのです。

左から　奈良選手　パートナーの森裕輔さん

一昨年、スポーツ基本法が施行されました。世界共通の文化であるスポーツを、障害の有無に関わらず、すべての人がする社会にして行こうと掲げられています。そのためには今、とにかく知ってもらうことが急務です。先述したように、障害のある人がスポーツのシーンをみることは、実際にスポーツを始めたり、何かの行動を起こすきっかけを得たり、と社会への一歩を踏み出す一助にもなります。そうして広がっていくことで障害がある人がスポーツだけでなく、自由にやりたいことにチャレンジして、大活躍する社会になるのも遠くないはずです。

一人でも多くの人に届くように、もっとたくさんのスポーツを、もっと多様な視点でとらえ、ＩＣＴを活用して発信を続けていくつもりです。

さて、 バトンは、高知県にお住まいの坂本世津夫さんに引き継ぎます。坂本さんは、総務省の情報通信白書の編集委員を務めるなど、幅広い知識とバイタリティに富んだ方です。きっと、熱い思いをコラムとして語っていただけることと思います。

それでは、坂本さんにバトンをお渡しします。